

第二期 第五十五号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2021. 02. 20 定有堂書店 発行

心模様

奈良 敏行
(定有堂 店主)

心模様

どこかですれ違っていた人々

奈良 敏行

「深い学び」をめぐる IV

三浦 永理

打倒 A I ～大学入学共通テスト元年

松田 裕史

人口が多ければエライか (笑)

芝野 浩貴

食べて嗅ぐ話

萩原 俊郎

八代日記 (十一)

鳥居 貴彦

現代ラビリンス考

齊藤 仁昭

鳥取あれこれ その五十四

ムラカミヒロミ

白の恐怖

内田 克彦

トリコロール

秦阜 梅林

猫は力カオを食べない

あきの素生
ドラマリア

…… 編集後記



新型コロナの災厄も一年になる。いまだよく理解できないことが多い。気配だけが膨らんだり縮んだりしてなるとなくの閉塞感がつづく。この気配の中で本のビオトープ「音信不通」の寄稿者の方も幾人か消息が途切れがちとなる。書き記す意欲が湧かないという理由のようだ。わたしも十一月と十二月は長めの文章が書けなかった。それで断章(百四十字)を九本並べていつもの分量に収めた。思うこと感じることはあるのだが、それを連ねて一つの文章にまとめることができなかつた。思うことを文脈に連ねるには、因果関係のような「思い」の外側から介入するものが必要となる。

人との応酬もそんな事のひとつだ。他者と出合うことによって自分の文脈が補完され、自分への見方が変わる。変わることの積み重ねの中で因果関係が動き出し、語り始めることができる。

近頃本をまとめ買いする人が増えた。人と人との間が疎遠になったその隙間を本が埋めあわせするかのようになっている。昨年出合った印象深い言葉は「会読」と「耽読」だった。本屋を開業して四十年目に訪れたイノベーショ
ン（明日への橋渡し）のキーワードが「読書」だった。本屋が「読書」を旗印にしたら、もう後はないと思え震撼とするものがあつた。外部が消えるという気がしたからだ。この間自分でも乱読状態がつづいた。読み過ぎると思ふの因果関係が途切れがちになる。つまり外へと語りかける意欲が弱くなる。

わたしは人のプライベートに関した話を耳にしても、記憶に残ることが少ない。人に興味を持ちその人を知るといふことは、その人がどんな本を読んできたか、そしていまだんな本を読もうとしているか、その二つだけで十分に思ふ。本屋の人間という側面というならば、その人はわたしにどんな本を教えてくださいかその一点でしか記憶が残らない。不要不急の日々の中では結局「読書」だけが露出してきた。

店頭でときおり会話がはじまる。数人の人が「これナラさん向きだね」と手にする本に『空間は実在するか』と『認知バイアス』があつた。わたし自身の求めている観念と定有堂という本屋の課題のようなものを意味していた。本には知らなかつたことを知ろうとする方向と、

知つてゐることを崩壊させるといふ二方向がある。わたしは後者の方を中心にして本の世界を求めがちだ。

『空間は実在するか』はむしろ時間に主眼をおいたもので、時間は人間の記憶ひいては生命システムに基づいて成立すると語る。時間や空間が成立する場所は、人間の環世界つまりイリュージョンの上だと説明される。このイリュージョンという言葉は日高敏隆『動物と人間の世界認識』に「イリュージョンによつて生まれた現実がまた次のイリュージョンをつくり出す」と階層構造として説明されるところと関係している。

イリュージョンには階層構造がある。生物としての人間の基盤もそのようなレイヤーだ。そして本屋には当然本を媒介としたイリュージョンがある。書物は概念構築によりその世界を独自に開く。つまり書物とはイリュージョン（環世界）のブロックなのだ。そしてときに本屋も、それにならつて一つの環世界を擬態する。

繰り返し本を読み人に教わる。それは自分が抱く不確実な規則な現象をなんとか秩序あるものとして理解したためだ。人は知覚し感じとる。それがなぜ知覚できない「世界」といふ外部へ向かうのだろう。その「世界」は環世界（イリュージョン）でアプリオリに与えられてゐる。考へるということとは概念を積み重ねるだけのことなのだろうか。「世界」（概念）に耳を傾けると、しか

しそこには「沈黙」しかないのがいつまでも不思議に思える。

(参考)

2021. 01. 16

橋元淳一郎 『空間は実在するか』集英社新書 2020

鈴木宏昭 『認知バイアス』講談社ブルーバックス 2020

日高敏隆 『動物と人間の世界認識』ちくま学芸文庫 2007

太極拳教室(会場) 定有堂二階 葉香クラブ(荷葉)

毎週 水曜 十九時半から・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」(岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

『本屋巡礼・2020年の記録』

本屋さんウォッチャー』どむかの出版年鑑2020』

歸山健一さんは月刊「本棚の溜息」通信をハガキで行し、三段組みで一ヶ月の「本」に関わる出来事を報告する。自分で見て回った書店探訪記だ。この二月で36号だから三十年はとうに過ぎている。定有堂の壁に掲示してあるので見た方も多と思う。

この書物はここ一年の探訪の記録だ。CDケースと同じ大きさ同じ形だ。十二ヶ月分のハガキと訪れた書店の写真がカラーで組み込まれている。「どむか」は交流会。「出版年鑑」は出版ニュース社の仕事を引き継がれているので、いま等身大に表現されたという含みがある。

好きというだけで人生を「本」に捧げる歸山さんの存在は福音だ。本業と関わりなく自分の時間を「本」のある場所とともに生きる。こんな使徒の存在は「本」を特別なものと教える。「本」が特別だから「使徒」を導くのだろうか。奥付のようなところに9と12と9が手書きにされている。その貴重さに身震いするものがあつた。

どこかですれ違っていた人々

映画『花束みたいな恋をした』に寄せて

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

鳥取に来て初めて映画館に行った。目当ては、私が敬愛してやまない坂元裕二氏による脚本映画『花束みたいな恋をした』だ。

正直、ベタな恋愛映画を見に行くようなタイプの人間ではない私は、連続ドラマを休んでいる坂元氏の久しぶりの新作映画が、恋愛物だと聞いて少し落胆した。きつと誰かがデートに誘う口実に使うような映画なのだろうと。

私が「脚本家・坂元裕二」なる人を強く意識したのは、二〇一〇年の連続ドラマ『Mother』だった。虐待を受けている子供を教師が誘拐し母親になろうとするという衝撃的な作品だ。横で母が涙を浮かべながら、ドラマを観ていたことを今でも鮮明に思い出すことができる。二〇一一年の『それでも生きてゆく』は、とある事件の被害者家族・加害者家族をめぐる物語で、演劇的なセリフの応酬が印象的であった。『問題のあるレストラン』では

「女子」として生きるあの気持ちにあらゆる角度から寄り添ってくれたし、『カルテット』では少しずつのすれ違い、嘘を重ねていく姿を鮮やかに描いていた。

「もともと僕はテレビの何百万人、下手したら、何千万人っていう人が観るようなものを書くタイプの人間では全然ないんですね。(略)どこかで誰かがひとりで「こんな風に思ってるのは私だけなのかな」と思ってるのを見つけてきて書くのが仕事だと思ってる。入り口からして、超少数派(笑)。」(『脚本家 坂元裕二』二〇一八年)

と自らを評しているように、坂元作品は、ありふれた日常から、どこかにいるようにでない少数派の人生を描いている。にもかかわらず、ある一定の人々が「これは私の物語だ」と思えるような作品になっているのだから、やはりテレビ的な人である。そんなひとりが私であった。それほど信頼している作家なのだから、やはり観にいかないのは後悔すると思つて、ひとり映画館に向かった。

ヒロインの絹は、東京出身、広告代理店勤務の両親を持つ実家住みの大学生。一方で、その相手となる麦は、新潟出身で、イラストレーターを目指していた。二人は

明大前駅で終電を逃すことで出会う。小説や漫画など、サブカル的な趣味がピツタリあった二人は意気投合し、付き合ひ始めて一緒に暮らすようになる。二〇一五年から二〇二〇年までの劇的ではない平凡な日々が物語で、観客は冒頭から二人の関係が終わることを知りながら映画を観る。

作中は様々なサブカル的固有名詞に溢れている。加えて、東京の固有名詞。出合いの場である明大前、調布から徒歩三十分ゆえに広めの二人の家という京王線沿いと、華やかで嘘くさい西麻布や表参道。あたかも、二人と自分がどこかですれ違っていたかのようにも思えるのは、東京の区分けが誠実だからだろうか。（そんな区分けが日本全体でどれだけの人に伝わる物なのかは分からないが。）

夢を見ていた時に一緒にいた人と、人生を共にする人が違うという物語は、ある意味映画『ラ・ラ・ランド』を思い出させる。あれはロサンゼルスが影の主役ともいえたが、『花束—』の場合は、東京である。ミュージカルにはならないが、カラオケに行つて歌う東京的日常。作中、妻は夢を諦め就職し、安定を目指していくようになる。そのことからすれ違ひが重なっていくが、それは二人の「大人」になり方の違ひだったのかも知れない。

東京出身の絹は、東京に住み続けることにある意味格闘しなくてもいい存在だ。だからこそ、彼女は東京の中で自立するときに、あえて親の「代理店的な」王道の価値観・職業観と別れなくてはいけなかった。だからこそ、小説や舞台、映画など、自分が選びとつたと思うような作品を楽しむことを忘れないで生きていける。一方で、地方出身の妻は二人の生活のために東京にしがみつこうとが、すなわち収入の確保になった。イラストの夢を追うことなどできず、できる限り東京の王道に順応すること、東京の男になることを求めて、ビジネス書やパズドラに染まる羽目になり、かつてのように小説も映画も楽しめない。

我を忘れて現実に対応することと、現実を見据えて自分を見失わないこと、どちらも「大人」になるということだが、摩擦を生む。二十代の時間はそれだけ劇的で、きちんと五年の変化を『花束—』は描いていた。

二人のように趣味を共有することは楽しい。でも、私は映画を観るならひとりがかよったりする。そんな風には映画をひとりで見、やっぱり楽しかったし、美しかったなと余韻に浸つて、ガラスケースに入れて、そういう私の人生も、嫌いじゃないなって思うんです。どうかそんなひとりの誰かにそれでもいいと伝わりますように。

「深い学び」をめぐる IV

松田 裕史

(高校教員)

昨年はコロナ禍により教育現場も大きな変化を強いられた。4月、研究仲間で京都の公立高校に勤務されている先生から、「一週間で学校現場のICTが十年分進んだ」というメッセージが届いた。京都の学校よりコロナの影響は圧倒的に小さいこ鳥取でも、教育現場におけるオンライン化はずいぶん進んだ。アナログ人間、デジタル難民である私でもZoomを使った分散授業やGoogle Classroomを使った課題配信・チェックを行った。

しかし、今のところデジタルツールを使った授業実践に深さがあつたかどうか心もとない。同じテーマでGoogle Classroomを使ったオンラインでのライティングと、従来の紙ベースのライティングを実験的にやってみたが、紙ベースの英文の質のほうが明らかに良かった。オンラインでの生徒のやり取りは確かに即興的ではあったが、内容的にどうしても深まりが欠けた。

見た目にはICTを駆使して実践をしているように見えるかもしれないが、なにしろ手ごたえがない。オンライン授業は「ハイテクなようでローテク」、これが私の実感だった。だが、なぜそのように感じるのか、うまく言語化できないでいた。そんな時、柳瀬陽介という英語教育の研究者がオンライン授業の欠点を喝破する記事を見つけた。

柳瀬は次のように言う。「第1に、オンラインの仮想コミュニケーションには、精密なアイコンタクトがない。画面にはそれなりに相手が写っているが、その相手の視線と自分の視線がぴたりと重なる瞬間がない。…中略…オンライン授業には教師と学習者の目がぴたりと合う喜びがない。」「仮想コミュニケーションの第2の奇妙な点は、声が機械のボリュウムで調整されるものになることだ。…中略…すぐれた教師は、絶妙な感覚でもって自暴自棄の学習者にすらも届く声を発することができる。だが、自らの声が相手に届く様子がわからないオンラインでは、それも困難だろう。」「第3点は、距離の微妙な感覚も失われることである。対人間の距離決定は繊細なもので、人は無意識に互いにとって心地よい距離を相互調整する。だがZoomなどでは、カメラの位置や種類によって(仮想)対人距離が固定化されてしまう。教師も学習者も距離変化に伴う、心情変容の感覚を忘れてしま

う。」第4点は、仮想コミュニケーションでは、教師と学習者が共に注意を向け、そこからコミュニケーションのコンテキスト(文脈)とテキスト(発話文)を創出することが困難なことだ。…中略…オンラインコミュニケーションの画像は固定されるため、偶然に見いだされコミュニケーションに発展する対象はほとんど見えない。「精密なアイコンタクト、声、距離、コンテキスト…これらの要素こそまず授業を成り立たせる重要なものであるはずだが、ICT全盛の今日、ついで教育現場からも研究誌からも忘れ去られがちなものになっている。柳瀬の結語は次のようになっている。「学習指導要領が宣言するように、英語科が本来にコミュニケーションを図る資質・能力を育成する教科なら、英語教師は今こそ、ICTによる仮想コミュニケーションでは達成しがたい生のコミュニケーションの力を教室・学校で率先して体現するべきだろう。」

コロナ禍が収まってもオンラインとオフラインのハイブリッドは続くであろうから、いつまでもデジタル難民を謳歌していることもできない。ただし、オンラインにおける技術を向上させることだけに注力し、最新のノウハウを消費してはまた次のノウハウに乗り換えるループにはまることは避けたい。ある程度の技術は必要だが、オンラインとオフラインをメタな視点で見る姿勢こそ忘

れてはならないだろう。

また、対面であろうと履修主義のもと、三〇〇四〇人の同調圧力のかかる集団で過ごすことから生まれる問題や、オンライン授業で救われる学生もいること、その事実が提起する問題点も相変わらず見逃せない。

一月十五日の朝日新聞における長崎大熱帯医学研究所所長・山本太郎の寄稿記事に「物理的な接触は減っても、共感を育める近接性のある社会」という言葉がある。教育現場においてもそのような環境を創り出せるのか、大きな課題である。

* * *

『音信不通(第四〇号)』の中で、芝野先生の次の言葉がある。「主体的・対話的・深い学びは大事な概念だが、それは生き物と対峙してこそ回り始める。」

2次元ではない生徒という生身の人間と対峙することの意義や価値を、オンライン授業を機会に再考してみた。

打倒A I

大学入学共通テスト元年

芝野 浩貴

(地球探究家)

まず、次の二文の①と②を見比べてください。

①「共通テストって今何があつてま言いにくい訳ですけどま短期色んな分野を探索していく中で要するに探索だけ留守だったですよね一番にはあのーバカロールやからのアプローチとか経産省からな人だもう昔からのアプローチでやっぱりまあそのそこで僕は従えるつて感じじゃなくですね数学をというものを何だ? ということの語にしているという形ではまここから来てま探索ということからは逃れられないじゃないかってことですよねでそうした時に例えば今あのー階段の問題がありましたけどもそんなに難しいものだと思うというよりも中学校でやってた新聞だと例えばこれ直産だけ合同数字で行く訳ですけどもまあまあ例えばさん大丈夫だしますで地元のま例えば富士山はいとしたあれだけの話ですで面白いねあの離れてしまうのでしませんけどまえ幽霊有益というか

地球だしていくんだねっと人になりきって千葉市から明日までずっと教師では見たこともあるんですけどがなる切らなきやいけませんね今あるビルとか見てその江戸の人が何をメルクマークとして歩いたのが左側海だということだけは富士山っていうのはどこに行つてもま目安ですなりますよねでここ曲がつてしまつてところはまだ結局彼は通算大学生の話になつてしまつてのは直線今していくなるほどまちよつとさんだけのところ今現れてきましたよねでもしここがまた不規則でなくうん東京であればまあどこに抽選でを使うかな? っていうのは丁寧が不自然ですかね? 高い抽選で買つてほしいです抽選でっていうのは表裏的にここできませんすよね予言でいいっていうのは休日でもなくとも最後でここできませんすよねでし料理の鉄人のお問題にもありますこの前宮ほやほやの資料のせいだと思ふんですがまあそんな指揮をバンバンからでも数学的考え方君たちがやつてるピタゴラスだけど直角さんだけだということからまひろがあつて行く訳ですがまあ皆さんセクションでそうだと思ふんだけどもサイホンでっていうのがまもし覚えてしまつて光岡接触できるか分からないうけども体の中に入っているならば大体まよつとさんだけでも色んなものすねまもちろんあのーじゃなかったがあるけれども数学的に進めていけば説明をできたりしますよね例えばすね今は例えば最後でっていうのは

百四十百助手走りだと障害がありますね皆さんはどれくらい言えるでしょうか」

②「私の話のテーマですが、共通テストと探究がどう関係するかですね。資料では、1番になります。資料1では、バカロレア、経産省、文科省からのアプローチを載せていますが、一言で言う、「探究」×「数学」が共通テストになるだろうということです。先程の階段の問題は測量学と繋がるわけですが、いろんな分野を探究していく中で数学を見つけていかなければならない。直角三角形がどこに埋まっているのか？先程大山の話をしました、三角形を富士山だとします。地球探究の活動で日本橋から京都まで一気に歩いたことがあります。今あるビルや道路でなく、江戸時代の人になりきって、本当に江戸の人が歩いた道をなぞってみました。その時のメルクマークは富士山となります。伊能忠敬は富士山の高さで海岸線の測量の誤差を修正しました。歩く道の軌跡をくねくね曲線になると、2次曲線で、数学IIIや大学数学での計算になりますが、仮に直線だとすると、重力方向にも水平線方向にもたくさんの直角三角形ができます。「万物は直角三角形である」更に、不規則でなくて等分点をプロットすると、これまた縦横に中線定理を使う問題が作れる。中線定理は余弦定理2個、更に直角でなくても一

般三角形の頂点から対辺に垂線下ろせば直角三角形ができる。余弦定理は三平方の定理2個。ピタゴラス数に關しては、資料2の哲人の講義の中でも宮古で取り上げています。あとは、三平方の定理をどれくらい証明できるか？ですね。100通りなのか、150通りなのか？みなさん、どうですかね、何通りの証明ができますか？」

①は私の講義の音声を書き起こしで変換したものの(修正をかけることなくそのまま掲載しています)で、②は私が音を拾って伝えたかった意味に変換したものです。コロナ禍で若者の教育がないがしろにされ、オンライン教育やプログラム教育の掛け声で消されいく大きなことがあります。この文は第一回大学入学共通テスト実施前、一都三県に緊急事態宣言が出された日に投稿しています。入試は無事終わったのでしょうか？AI翻訳についての解説は次号(95号)に引き続き記します。

なお、右記の講演の詳細は、新数学教育観に応答する学びII、(シヴァ神・マスクドツル・数理哲人共著、プリパス知恵の館文庫 2020年12月)に収録されています。

人口が多ければエライか（笑）

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

年明け早々、「鳥取県の推計人口が今年、戦後最少の54万人台に突入する見込み」という記事が地元紙の一面に載った。「ああ、やつぱり」「ついにそこまで」。いろいろ反応や感想はあるう。が、四〇年前、岡山からこの人口最少県に好き好んで移り住んだ人間としては、「ものは考えよう」とも思う。

◇ ◇ ◇
もう四半世紀も前になる。作家の嵐山光三郎さんを新聞社の講演会に呼ぼう、ということになった。すると先方から「周辺の温泉情報を送って来い」という連絡。さすが自称「温泉王」、魂胆は見え透いている（笑）。その後どうなったかは、嵐山さんのエッセーから。

「萩原君から、ワープロでびっしり書かれた返事が来た。その内容はおよそ次のようなものであった。

鳥取の魅力と申しますと、まず鳥取砂丘、そして二十世紀梨、松葉ガニ、大山あたりが相場で、人口六十万

の全国最少人口県であります。過疎、高齢化が問題となっておりますが、要は見方の問題で、庭つき、田畑つき一戸建てあたりまえというすばらしいところです。六十万人のためにテレビ局二つ、新聞社一社、プロ野球のできる野球場二つ、飛行場二つ、デパート三つ、こんなぜいたくな県はないと思うのです。

萩原君の手紙を読んでいると、早く行きたくなってウズウズしてきた」（講談社刊「この町へ行け」）。

◇ ◇ ◇
何も、嵐山さんを誘い込むためにあれこれ美辞麗句を並べたわけではない。本当にそう思っていたのである。就職先に鳥取県を選んだ理由は二つ。ひとつは一度倒産しながらも頑張っている地元紙があったこと、そしてもうひとつは「人口密度の低さ」、海あり山ありの県土に岡山市より少ない六十万人が暮らしている魅力。

◇ ◇ ◇
同級生らはなぜ、毎日、満員電車で揺られ、ひしめき合い、行列に並ばないと飯も食えない都会生活にあこがれるのか：思えば私は変な若者だった。しかし、猫の写真展でお世話になった岩合光昭さんと東京の事務所での鳥取の魅力を話していると、「これ言うのと誤解されるんだけど、人が少ない空間がいいんだよね、鳥取は」と、こそっと教えてくれた。わが意を得たり、と喜んだ。

◇ ◇ ◇

話を元に戻す。無事、倉吉を訪れた嵐山さんを横丁にある昔ながらの鯛焼き屋に連れて行った。「倉吉にはMドナルドもKンタッキーもないんですよ」と言うと、「それは素晴らしい！ そんなもの町に入れてはいけません。町の鯛焼き屋こそ、大切にすべきです」と毅然と言いつつた（今はMもKもあるんだけどね）。思えば、この作家ははるか先を読んでいた。エッセーの続き。

「倉吉はのんびりした奇人がそろっているいい町であった。人口五万二千人、きらきらした自然に囲まれ、歴史ある町並みがあり、住んでいる人はゆつたり生きています。過疎だというけれど、こういった過疎なら、人間らしくていいじゃないか。百年後の日本は人口三千万人に減って、日本中が過疎になっている。倉吉はそれを先取りして豊かな生活を愉しんでいる」（同）

こういうことを書くと、「君は何も分かっていない。人口減で日本経済は傾く。消費の縮小が問題なんだ」などといきり立つ方がいる。ただし「では、どうするの？」と切り返すと、婚活や出産奨励金ぐらいいしか出てこない（そもそも人口対策のために結婚や子育て支援をするのではない。だが政治家たちは分かっていない）。

嵐山さんが四半世紀も前に予言したのは、「人口減少はもう現実である。だとすると、われわれの方が暮らしや価値観、経済のあり方を変えるしかない」ということ

だろう。その「先駆け」として彼の目に映ったのが倉吉だった。

◇ ◇ ◇
地元紙は元気の出ないデータを載せたが、実はこんなデータもある。私なら両方を書く。

2019年度の鳥取県内への移住者数は過去最高の2169人。八年連続の増加で、2015年度からの累計は1万427人。なんと五年間で1万人の「新しい県民」を迎えているのだ。それでも高齢者の死亡や進学・就職で県外に出る若者の数がこれより多いから、必然的に冒頭のような結果になる。

しかし「生まれたから住んでいる」人より、「ここが気に入って住むことにした」人がどんどん増えていったら、どうだろう。倉吉では最近、移住者やUターン組が店を次々出している。このコロナ禍で「都会↓地方」の流れは加速する。都会にいったん出た若者もいろいろ考えるかもしれない。

未来は決して暗くはない。人口たった五百万人のフィランドは、幸福度ランキングで三年連続世界一である。人口が多ければエライか（笑）。要は、数ではなく、住む人の中身なのだ。

食べて嗅ぐ話

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

家の二歳児がイチゴをほおぼっている。イチゴは大人の口にも大きいサイズだ。そんな口に入れたらイチゴの果汁で濡れるのではないか。イチゴで濡れた人っているだろうか。じつと見ていると二歳児がごくと喉を鳴らして「もういっこー」と言った。

ヒマなのでぼーっと外を眺めている。外を眺めていると白い袋を持った男の子がやってきて「カスタードクリームと粒あんどっちがいい」と聞く。え、どっちが好きなんと聞くとクリームがいいと言う。「クリームはもう一個買っている」。じゃあ僕もクリームもらおかな、と言いつついま僕がクリームもらったら残った粒あんはどうなるんや、クリーム二つ残してあげた方がお姉ちゃんど喧嘩にならんくていいんか、でもクリームと粒あんが残った方が二人で半分づつ食べられて両方味わえるしいいかも

しれん、など五秒くらい考える。ずっしり重い袋はまだあたたかい。頭からいくか尻尾からかじるか、コーヒータか淹れようかお茶にしようか迷っている。迷っていると立て続けにお客さんがやってくる。この三日間まったく誰もこなかったのになぜ今。男の子はとつくに隣のマンションに帰っていて、たい焼きはすっかり冷めている。

遠くに行けない。言ったことのある場所なら過去の記憶にたよることもできる。行ったことのない場所は文章を読んだり、映像を眺めたり、地図をずっと見たりする。地図はずつと見ていられるね。知ってる場所も知らん場所も。匂いと味は難しい。「あそこにいきたい」は「あそここの匂い変やったな」とか「あれもつかい食べたい」ととても近い気がする。

フェリーで別府に行ったことがある。そろそろ、というところで自動車に乗って着岸を待つ。カンカンカンという変な音。ズーンという振動。船の甲板がガバーっと開く。途端に乗っていた四人のうち三人が「なんやこの匂い！」と騒ぎ出した。硫黄の強烈な匂い。別府に帰ろうとしていた一人だけがぼかんとしていた。とり天もおはぎも、少しづつ硫黄の香りをまとった町。どうやったって京都では再現できない。

通信の手段のことを考えている。手紙は文字を送る手段。電話ができて声そのまま届くようになった。テレビは映像を一方的に送ることができる。テレビ電話やらなんやらで人間は映像を互いに送り合うようになった。なんて便利。そう考えると文字しか送らないファックスとメールはちよつとした退化なのだろうか。

で、次の進化は匂いと味なのではないかと思っている。なんか機械を使って匂いが届いたらいいじゃないか。「あの名店の味をご自宅で！」とかそういうことではない。今、あの場所の香りを居ながら体験できる通信。なにに使うかとかはまあいい。電話をしていて、急に「ちよつとこつち匂いも送るね」とか言つて香りの通信がおもむろに始まるのだ。人んちの匂いってみんな違うしとてもいいよね。「これいたんでるかな？まだ食べれる？どう思う？」「ちよつと匂いしてみたら？」「みたいな会話が遠く離れた二人の間でできたらいじゃない。ロマンチック。あ、古本の状態を確認するのはどうですか。通販サイトにはタイトル、著者、出版された年、価格などがのつている。画像で状態を確認することもできる。でもいざ届いてみたらなんかタバコの匂いがついていた：とか。そんな残念なことも「匂い」のボタンをクリック

すればよい。この世からお買い物トラブルがひとつなくなる。あと「本屋に行くのとトイレに行きたくなるのはインクの香りのせい」という話が本真ならば、本屋の匂いを送ってもらえば便秘が改善したりして。じゃあ書店員は全員快便なのか。しらん。ネットの広告に匂いが付きだしたら焼肉屋は繁盛すると思う。

鼻にもっと活躍する場を与えてやつてほしい。誰か開発してください。香り送る装置。匂い電話。電臭器。

なにが言いたいかというと、そんなことを延々と考えながらカスタードクリームのたい焼きをもぐもぐ食べているくらいに今、うちの店はひまだということ。もう二年前の生活に戻ることにはできないと思う。人はなにかしら相手に感染させるものを持った生き物だということがよくわかった。ウイルスのような悪いものだけでなく、いいものも含めて。そんなことを延々と考えながらカスタードクリームのたい焼きをもぐもぐ食べているくらいに今、うちの店はひまだ。

八代日記 (十一)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

十二月三十一日～一月三日

大晦日の夜から1月3日にかけて妙見宮にて初売り。寒波の影響で八代市も0℃前後の気温で厳しい寒さだった。野外での販売だったので、石油ストーブを売り場に持ち込み、ストーブの上で湯を沸かし続けコーヒーを飲みながらしのいだ。参拝客は例年とちがいが、密を避けて、年明け零時早々に集中するのではなく、三日間それぞれの時間帯で満遍なく訪れているようだった。

忘れないようするつもりで元日が結婚記念日なのだが、毎年ばたばたと仕事や用事が入って忘れてしまう。妻もあまり頓着がないので今年も特に何もせず過ごしてしまった。コロナの影響により親族で集まるのも取りやめたので仕事ばかりの正月だった。

一月某日

思いつきのみで仕事の決定をする上司がいるが、ぼん

やりとした思いつきのままに決定事項を進めてみると欠点が多く、我々部下がこまごました調整などをせねばならず、結局のところ雑務のみが増え、かえって効率を下げたり、たいした効果も上がらなかったりすることがままある。

しかし、優れた意思決定を行える人物は、思いつきであつても業務の細部までケアが行き届いているようなアイデアを投下することができるとはなからうか。業務の全体を俯瞰できているうえ、細部までしっかりと掌握している。分析と直観の両方を統合できているということになるだろう。そういう上司はありがたい。

自分とは言えそもそも思いつきさえもろくに浮かばず、思いついたとしてもそれが穴だらけでいざ仕事を進めてみるとまた一から考え直した、ということが多く、分析力も直観も全然駄目である。

こういうことを考えていると、書店員時代でさえほとんど興味のなかったビジネス書に、四十歳も過ぎてようやく関心が持てるようになってきた気がする。

一月某日

アトレチコマドリーがシーズン前半を首位で終えた。レアルマドリーとバルセロナの躓きがあったとはいえ素晴らしい結果だ。インテンシティと継続性を見習わねば

ならない。

一月某日

配達の合間に長崎書店に立ち寄る。小さな重機が入つてなかなかの音量で床をガシガシ剥がしている。リニユールへの気合を感じる。楽しみだ。

※ ※ ※

きつと氣にいるんだよ

ちよつと氣の触れたような甘い恋の話も

かつたるい駆け引きも

やつと手に入れたような物語の終わりも

思い出すかい忘れ去るのかい

声も裏返り笑いそうさ

踊りだすかい目を伏せるのかい

声も裏返り叫びそうさ

僕は一掃しに行くんだよ

胸の張り裂けそうな長い長い時間を

きつと氣にいるんだよ

床へ放り投げるように歌う君の言葉も

思い出すかい忘れ去るのかい

声も裏返り笑いそうさ

踊りだせるかい息ができるかい

笑いかけるかい昔のように

僕らずつと見ているんだよ

意味もすり減りそうな長い長い続きを

きつと氣にいるんだよ

嘘で凍りだしそうな長い君の話も

思い出すかい忘れ去るのかい

声も裏返り笑いそうさ

踊りだせるかい息ができるかい

笑いかけるかい昔のように

(ケバブジョンソン「長い話」、作詞・杉浦真寛)

現代ラビリンクス考

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

駅前大火で焼失する前の太平マーケットが、子供にとつて恐ろしい気な迷宮であったことは以前にも触れた。昼なお薄暗く、白熱電球のほの暗い明りだけが頼りで、果てしなく長く、見通しが効かず、母親の手を離れたが最後、二度とこの世には帰れなくなるような、そんな不安と恐怖感を醸していた。地図で見ると、現在のサンロードと交差するカラー舗装道路の辺りが、ほぼそれに当たるようで、その間、せいぜい百メートルくらいの距離ではないのだが。

遠く異朝に、その名も高き香港の九龍城塞、歌にもなったアルジェのカスバ、文学にもしばしば登場するプラハの錬金術師街があり。

近く本朝を伺えば、秋葉原のラジオ会館、中野のブロードウェイ。まず異論なく後者こそ、現代の魔窟に相応しかろう。

一九六六年、東洋一のショッピングセンターとしてオー

ブンしたこの施設は、地下三階、地上十階、南北四百四十メートル、東西四十五メートル、高さ三十一メートルの巨大なビルで、四階までは商業施設、五階以上はマンションになっている。

「制御不能建築」「暴走を続ける流動体」(平松剛)と言われ、「香港の九龍城みたいになりたい」(古川益三)と語らしめ、バウハウスの「建築は生物学的過程である」(ハンネス・マイヤー)という理念を地で行くようなこの施設、そもその構想が、こうなることを運命づけていたような気がする。

経済性を最優先し、高さ制限、建ぺい率制限の法改正の隙間を縫って計画され、商業区には入る限りの分譲店舗を押し込み、天井高は低く、通路は狭くなった。各階の基本構造は、南北に二本、東西に三本の通路が交わっただけの単純なもののだが、建物の外形や、変則的なエスカレーターやエレベーターの設置場所などが相俟って、廊下がジグザグになり、余分な通路が入り、さながら迷路のようになってしまった。加えて、分譲型であったために、モールとしての統一感もなく、さらに、長い時間を経る間にオーナーが替わり、転貸が繰り返され、区画は一層細分化され…かくして、今日の姿がある訳である。

狭小店舗が汗牛充棟、商品がはみ出し、人が群れ、容

易に方向を見失ってしまふ。いつも思うが、消防署の査察をどうパスしているのか不思議でならない。

こうこういう蠱惑的な場所を小説に書きたくなるのは人情で、渡辺浩武の『中野ブロードウェイ脱出ゲーム』のような作品が出てくる訳だ。事実・伝説をない交ぜにして、正に「生物学」的な建物を描いて見せる。ちなみに著者は、同施設の住人でもある。

さて、西に目を向ければ、やはり大阪・梅田の地下街しかなかるう。初めて訪れた時は眩暈がしたものだ。正に「六道の辻に迷うなよ」の世界である。人は多く、雑然としていて、行く先が見通せない。地下街に交番があるのも宜なる哉という混沌ぶりだった。地上からは、目と鼻の先にあるA書店に行きたいだけだったのに、えらく苦労した思い出がある。(柴崎友香が同じような話を書いている。彼女は大正区生まれで、「キタの地下街は蜘蛛の巣のようで難易度が高い」と認識していたそうだが、雨の日に、大阪駅からA書店に行こうとした所、友達が「濡れんと行けるで」と地下街を人混み掻き分け「ごくごく進み」店まで案内してくれたという)

梅田の地下は、戦前に地下「通路」として誕生したが、戦中の防空壕、戦後は罹災者や引揚者、浮浪児の棲家と

なって「闇市」化し、人が通るのも恐ろしい場所になった。既にラビリンス化の予兆があった訳である。

これらを一掃するため大阪市が地下「街」化を計画し、一九六三年、ウメダ地下センター(現ホワイティ梅田)が誕生。そして、堂島地下センター、阪急三番街、ディアマール大阪、大阪ガーデンシティと、拡張を続け、「地図にない街」「人工の夜の街」(篠崎昌美)が広がっていく。

堀晃は、この土竜穴か蟻の巣のような地下街を舞台に「梅田地下オデッセイ」を書いた。現代風に分類すれば、サバイバル系のダンジョン物と言えようが、作者の狙いはコンピュータ・ディストピアとミュータント・テーマの組み合わせであって、某有名作品へのオマージュも感じられる。これをさらに進化させると柞刈湯葉の『横浜駅SF』ということになるだろうか。

諸星大二郎の「地下鉄を降りて」は、地域を限定していないが、気紛れから普段と違う経路を選んだばかりに、地下街を彷徨する破目に陥る中年サラリーマンを、ユーモラスに(かつ、極めてブラックに)描いた傑作である。

鳥取あれこれ

その五十四

内田 克彦 (地域研究家)

司馬遼太郎著『花神』に、鳩居堂塾頭の太田静馬が場をする。

太田は因州鳥取藩士で、「村田」蔵六が適塾の塾頭をしているときに入塾してきた。蔵六はこの太田に対し、身を入れてオランダ語の手ほどきをしてやったことから太田は蔵六を終生の恩人だとおもい、こんど蔵六が江戸で塾をひらくというので、緒方洪庵のゆるしをえてはるばる大坂からかけたのである。

太田は一八六九(明治二)年に惜しくも数え三五歳で亡くなった。太田の息子が、一八五三(嘉永六)年に生まれた村岡範為馳である。村岡は、一八七〇(明治三)年一二月に、鳥取藩の貢進生に選ばれ、大学南校に入る。一八七八(明治一)年ドイツのストラスブルク大学(ストラスブルク大学、現在はフランスに属する)に留学、一八八一(明治一四)年には、日本人として初めて外国誌(ドイツの有力一流雑誌)に論文が掲載され、日本人

として初めて外国の博士号(「ドクトル・フィロソフィー」の学位)を取得している(参照 上原和也「村岡範為馳のこと」)その後、一八九一(明治二四)年八月には、日本初の論文による博士号を取得している。

さて、同年、伊沢修二に次いで二代目の東京音楽学校長に就任する。翌年の夏に帰省し、八月三日には、因伯教育会主催(会場は不明)で「普通教育における音楽」と題し講演した。篠村昭二著『鳥取師範物語 上巻』には、「その影響はたちどころにあらわれて」、その年の九月には田村虎蔵、林重浩、永井幸次が音楽学校入学のために上京した、とあるが、この三人のうち講演を實際に聞いていたのは誰だろうか。丸山忠璋著『言文一致唱歌の創始者 田村虎蔵の生涯』(一九九八年刊)に、

その聴衆のなかに二人の青年がいた。「略」林甚蔵(重浩)と田村虎蔵であった。二人にとつて村岡は郷里輩出の大学者であり、とくにこれから受験しようという学校の長である。そういう人の話であつてみれば、片言隻句も聞き漏らすわけにはいかない。

とあった。田村も林も既に入学に向けた準備をしていた、とあり、一次資料の明示がないため確認する必要がある。

一方、永井の自伝『来し方八十年』では、父の脩（おさむ）がかつての教え子であった村岡の帰省の新聞記事を見て、幸次と一緒に宿を訪ねて学校の様子をきき入学志望であることを話した、と書かれており、講演会のこととは出てこない。

なお、『鳥取県百傑伝』の「岡野貞二」の項の中に、次の記述がある。

村岡校長に刺戟されて、永井幸治、田村虎蔵、林重浩が上京し、ついで黒部峯三、佐々木一、神戸絢、岡野貞一等が上京、これらは明治二十九年から三十三年にかけて次々と東京音楽学校を卒業している。

黒部峯三、佐々木一の名を初めて知った。この兩人についてもっと調べてみたいと、県立図書館に行き尋ねてみた。すると、『岩手百科事典』（一九八八年刊）に「黒部峰三」の項が、次のとおり載っていた。

一九〇一年から二年間岩手師範に在職、研究熱心で広い学識をもち、自ら作詞作曲し、県内で初めての音楽会の開催、唱歌集を作るなど多くの影響を本県に与えた。また盛岡中学・白百合学園の音楽講師を兼ね石川啄木・節子に音楽的刺激を与えたことも特記される。

村岡が校長を務めた東京音楽学校は、一八九三（明治二六）年九月、独立した学校ではなくなり、高等師範学校附属音楽学校（校長は高等師範学校長の嘉納治五郎が兼任）となったため、村岡は第三高等学校教頭となって京都に行くことになる。

村岡というのと、「我が国最初のX線実験者」と言われている。しかしながら、塩瀬隆之ほか編著『科学技術Xの謎』（二〇一〇年刊、化学同人社）によれば、一八九五（明治二八）年十二月レントゲンによるX線発見が、ドイツ留学中の長岡半太郎から翌年二月には日本に伝えられ、京都ではX線の発生に必要な装置がすぐ手に入らないため、村岡は島津製作所二代目の島津源蔵らと組んで装置自体を製作してその年の一〇月に成功したが、その時点では既に東京の三つのグループが成功していた、と記述されている。

因みに、国道五三号線沿いに一九九二（平成四）年に建立された顕彰碑のこの功績についての記述は「島津製作所でX線実験を行い、同装置製作の基礎をつくる」とある。

白の恐怖

武中淳彦(秦阜梅林 本名)

(楽人)

序

「パンデミックだ、雪崩のように世界中で流行する病気の事。いいかね、中国では毎年のように興味深い新しい病気が誕生している。おそらく貧困がその一因だろう。だがC氏病程威力があるものは、これ迄無かった、新しい病気だ。ゆうに500万人が亡くなり、1200万人が罹患しているが、少なくとも其の3倍の数の人が、レズ豆位の大きさの大理石のような、感覚の無い斑点が出来ているのを知らずに世界中を駆けずり回って居るところだろう…後略この病気は…ハンセン氏病よりも遙かに深刻で、遙かに興味深い、ハンセン氏病と同じなのは初めの兆候だけ。皮膚に小さな白い斑点が出来るが、大理石のような白い斑点だ。其れ故「白い病」とも呼ばれる。だがその後の経過は独特のもので、他の普通のハンセン氏病とは、全く異なっている。…後略

I

以上は1938年12月25日にプラハで48歳の生涯を開

じたKチャペックが死の前年発表した戯曲「白い病」の一節。今、コロナ禍中に読むととても80余年前に書かれた作品とは思えないリアリティ。「ペスト」を上辞したカミュは現在ベストセラーを更新中であるが此方の方は、日本の知識人の口にする様子もほとんど無い。

II

ペストの黒死病に対して、「白の病」※と呼ぶ感染症を想定し、病自体の不気味さと決定的な対抗策の無い儘死を待つ人のパニックを描写、医師ガレーンを主人公とする顛末を現在に即して読むと、此の預言者の慧眼に唳らされるが：

III

カミュが、黒死病をナツイスやファッシュのメタファーと捉え物語を綴ったやうに、此の寓話に於いても作者はジャーナリストティックな視点から、白の病に遭ってはパンデミックより遙かに甚大なる魔の手が病の蔭に潜んでゐて、其れと人が対峙出来るのか？其処にこそ主題があると考へ、更にカミュの小説に対して芝居と言ふ形を採って上辞して居る。

IV

そして我々がファッシュ批判として容易に想定し得る軍の統括者たる「元帥」。軍事コンツェルン、つまり財界のボス、クリューク男爵。大学病院の院長ジーゲリウ

ス枢密顧問官と言ふ権力側の三つ巴に、一介の町医者、外人で有るガーレーンを対立させ、奇妙な駆け引きの末、物語はラストを迎へ——我々に白刃の刃を突きつけつつ問ひ掛けて来る、最も大切なものは何か?! 人は何を犠牲にしても究極の選択を迫られた時、護らなければならぬものは何か?! 日和見主義的に其の日、其の場流され生きながらへてゐる我々に。そんな時の「敵」は、必ずしも先程の権利側に立つ三つ巴とは限らぬ、寧ろ本当に怖るべきは、最終的に一般市民、群衆であるかも知れぬひ事実。

V

「チェコの赤髭」とも呼びたひ、ギリシャ出身の開業医は依然、敢然と権力に屈することなく立ち向かふ。

現実として彼のガーレーン法以外、医療行為として有効な手立てはなんら無く、文字通り人々が生存の鍵を託しうる唯一無二、絶対的な存在。さうかうする内、世の齡を上回る人間：つまり我々は淘汰されてゆく…：なんら對抗措置の無い儘リミットの確実に定められた刑が次々執行され行く。まるで此のコロナ禍の如く。生存への可能性、其れ以上に大切な問ひへの解答と在り方こそ突きつけられ恐怖は膨らみ続ける。

此れ迄「黒」に対して唯一の「救い」、希望であった筈の「白」が今牙を剥いて迫り来る、「真綿に首を絞めら

れる」やうな…：此れこそ預言者が我々に警告し逝った、最期の預言であらう。かつて「ロボット」と言ふ概念を最初に創造し、山椒魚やら、月世界を描き様々な問題を提起した預言者の…。

2021.01.15

〈今回の一冊〉 K. チャペック著「白い病」(1937)

阿部賢一訳岩波文庫(2020) 岩波書店刊

〈今回の一枚〉 Jスーク「アスラエル交響曲」ハ短調
作品27(1905~06) 他Vターリツヒ指揮チェコフィル
ハーモニー(1952年5月録音) スプラフォン

※註此の他に、各氏によつて「白い病気」「白疫病」の邦訳有り。



イラスト

秦阜 梅林

トリコロール

あきの素生

(くうなるめがね)



正月に放送された人気ドラマの特別編で、「咳もしても一人」が取り上げられていた。思いがけないところで放哉句に触れ、話の筋とは関係なくうれしくなってしまうた。

以前、放哉と山頭火の色の比較について書いた。「青」の句にそれぞれの違いがよく表れていて、放哉が海を好きなことが感じ取れた。その際あまり触れなかったが、山頭火の句で「青」が使われているものを見てみると、青葉や青田、山の青さなど、緑色を表すものが多い。実際に青色を表している句には、「青空したしくしんかんとして」「ころり寝ころべば青空」「飯のうまさ青い青い空」といった青空の句が見られる。放哉の「あらしがすつかり青空にしてしまった」「落葉木をふりおとして青空をはく」が、青空を風景(やその一部)として客観的に詠んでいるのに対して、山頭火の三句は、青空と自分のかわりを詠み込んでいる。そのかわりは肯定

的なもので、青空への近しさ、好ましく思う気持ちがかがえる。

放哉の『大空』と山頭火の『草木塔』で一番多く詠まれた色は「白」だ。

放哉の詠んだ「白」には、放哉句全体の特徴でもあるが、海に関するものと、身体を見つめたものがある。

氷店がひよいと出来て白波
足のうら洗へば白くなる

渚白い足出し

一方山頭火は、食物や植物の描写に、その色を用いている。

あたたかい白い飯が在る

洗へば大根いよいよ白し

つるりとむげて葱の白さよ

山のしづけさは白い花

放哉が洗い終えた足(の裏)を詠んだのに対し、山頭火は大根。放哉も大根を洗っただろうし(「大根洗ひの手をかりに来られる」「粉雪散らし来る大根洗ふ顔を上げず」)、山頭火だって足を洗ったと思うが、二人の心を捉えるものの異なりようが感じられて興味深い。米を洗う句も対照的だ。

一人分の米白々と洗ひあげたる(放哉)

米の黒さもたのもしく洗ふ（山頭火）

この放哉の句は、いろんな感情に結びつけることができる。「一人分」のさみしき、神経質に「白々と洗」いあげる様子、でもそれはささやかな達成感と取れなくもない。山頭火のほうは、たくましい生といった感じか。ちなみに、これは『草木塔』に出てくる唯一の「黒」だ。「米の黒さ」だから、墨のような黒ではないのだろうか。

放哉の「白」の句には、「一人分の」のようにさみしさやかなしさ、孤独感を託されているように感じられるものがある。

佛飯ほの白く蚊がなき寄るばかり

山頭火には、「銃後」の「もくもくとしてしづる白い函をまへに」や「旅心」の「霜しるくころりと死んでゐる」などがあるが、「赤」の句にもさみしさがにじみ出ている。

誰も来ないとうがらし赤うなる

病めば梅ぼしのあかさ

いつも一人で赤とんぼ

放哉の「赤」にはあまり見られない表現だ。

自分ほどの色に惹かれるだろうか。青い海も青空も好きだし、緑の山もいい。まっ白な雪景色も…と考えると、私たちが日常触れる自然の大部分を占めている色っ

て、青、緑、白、茶色、黒（夜空）くらいなのだ。今更ながらに気が付いた。赤がこれらの色と同程度の面積を染めるのは、朝焼け夕焼け、紅葉する樹木しか生えていない山（あれば）など、限られた時間、場所くらい。だからこそ目を惹き、意味を託したくなるのだろうか。背景からぼうと浮かび上がるような「白」のさみしき、目に沁みるような「赤」のさみしき。ここにも二人の個性が表れているのかもしれない。

句に彩りを与えるのは色名だけではない。先にも書いた雪や夕焼け、種々の植物についても考えあわせると、また違った見方ができるかもしれない。意外と大根の句が多い（そして人參は今のところ無い）という発見があったので、句から見る二人の食卓というテーマもよいだろうか。

最後に放哉の色の句で、好きなものをもうひとつ。とかげの美しい色がある廃庭

イラスト あきの素生



猫はカカオを食べない



ドラメリア (座敷わらし)

チョコレートが好きだ、毎日食べてもいいぐらい好きだ。だからこの季節は楽しい。世界が華やかでかわいらしいチョコレートで溢れている。

チョコレートと一括りに言っても、オースドックスなビター、ミルク、ホワイトの三種類以外にも今は新しいものが登場しているようで、見慣れない色・呼び名のチョコレートを見かける。調べてみると原料や製法が従来と異なるらしい。なるほど。

ひとつはブロンドチョコレート。ホワイトチョコを焦がしたような香ばしい味わい。そしてもうひとつがルビーチョコレート。ルビーカカオという原料からできており、ベリーのようなブルーティな酸味が特徴だという。天然のピンク色がかわいい。

しかし新顔のカラフルな彼らは、実はあまりわたし好みではない。だって、何だかせつかくのチョコレートを食べている実感がない……ような気がするのだ。してみると、わたしが好きなのはチョコ全般と言うよりは“カ

カオ”なのだろう。近年はカカオ分の比率を明記したビターなものも多く出回るようになり、カカオ好きとしては嬉しい限りだ。ちなみにストライクゾーンは七五〇八八%。これを超えるハイカカオはもはや薬に近い気がする。

ちなみにチョコレートを好きな理由はもう一つある。猫と暮らして以来ほとんどの食物を心穏やかに座っていただけなくなり、猫パンチやタックルを警戒せねばならなくなつたわけだが、そんな食いしん坊の猫たちもチョコレートには手を出さないからだ。猫はカカオの魅力にまだ気づいてない。幸いなことに。

猫はカカオを食べない。



・編集後記:

発行人がリュックを新調しておりましたが、ここ何年かはわたしもリュック生活です。でも何でも入るから、油断してあれもこれも詰め込んでしまいます。重たい。

ドラメリア(編集長)

黒い四角な箱のような撥水リュックを買った。人生三つ目のリュックだ。一度目は貰った。旅にもどこにも行かないが必要な荷物はひとまとめ。背囊ってどんな形だったろう。箱を背負って生きていく。

奈良敏行(発行人)